

最後の反逆

甲「私は苦しくてなりません。どうしてもわかりません。何を聞いても不安と苦しさが増すばかりです。」

乙「あたりまえです。」

甲「これならいつそ聞きはじめねばよかつたと思います。聞けば聞くだけ苦しくなるばかりです。」

乙「それはよいことです。」

甲「ちつともよいことはありません。聞かぬほうがましです。」

乙「今に皆わかります。聞かぬがましだと言ったところで、やめられますか。」

甲「やめられたら苦しみはいたしません。やめようにやめられず、といつてわかりはせず。刻々深い淵に沈んでゆくようです。どうにかしてください。」

乙「どうしてあげることもできません。深い淵があるなら沈みきつてごらんさい。」

甲「それがいやなのです。浮かびたいのです。」

乙「そこです。沈むものなら沈むがいい。浮かぶものなら浮かぶがいい。だが、そのあなたを困らしているものは、いったい何でしょうか。」

甲「それは、この聞いてくれない心です。こうして二日も三日も、あの懇ろなお話を聞きつつどうしても聞いてくれない心です。」

乙「そうでしょうか。………△△さん。いったいあなたは何がほしいのですか。」

甲「安心立命がほしいのですが。」

乙「なるほど、それで如来はいられますか。生きておられますか。」

甲「如来がいるか、いないか。生きているかいらないか。そんなことは問題ではない！ 私がほしいのは、安心立命です！」

乙「おい！ △△さん！ もう狐の尻尾はつかんだぞ！ あなたを困らしているのは、この狐だ、古狐だ。」

甲「なんのことです。何か古狐ですか。」

乙「おい、君は如来に用事はないのだ。安心立命に用事があるのだ。」

甲「それはいけないのですか。」

乙「み法を聞くとは、如来を聞くのである。如来は、絶対の権威をもって、われらの現実に君臨する。衆生の便宜のために実在するのでもなく、勝手な欲望の満足を得るための手段にもならない。ただ如来は無条件に絶対に、われの迷妄をその智慧光によつて照破しつつ、如来のために、如来を承認せしめるのだ。帰命というのは、如来にあつては、絶対の招喚の勅命であり、衆生にあつては、この如来に信順するところである。」

甲「わかりません。」

乙「それなのに、あなたは、如来の真実をば無視して、あなたの勝手から割り出した、欲を満足しようとするのだ。如来はいようがいまいが、真理がどちらにむいていようが、そんなことは問題ではない。ただ安心立命がほしいという。かかる人間に与

えられる安心立命はないのだ。あなたは、忠臣蔵に加わらない大野九郎兵衛だ。主君には用事なく、俸禄に用事があるのだ。俸禄が頂けなくなれば逃げてゆくのだ。主君を利用してはいるのにすぎない。だが、それは、今初まったことではない。その私の根性魂が、長い間、君を動かしてきたのだ。他人はどうとなれ、自分一人がよいことをすればいいという功利主義的な古狐だ。それが一切衆生を毒し、生死界を出現し、君自身を苦しめるのだ。それが今ようやく表に姿を現わし、最後の反逆を如来にくわだて、あなた自身を再び奈落に誘わんがために、今一度化けようとするのだ。」

甲「どうにかしてください。」

乙「如来は助け、衆生は助けられる。しかるに、如来を聞く以前に、助けられた状態を考えて、まず助かった姿となり、そこへ如来をつれてこようとするのがいけないのだ。今われをあげて、如来の智慧光をあび、その大慈悲に摂取されるのだ。その時、あなたは、出離の径なき、十悪五逆のわれを諦観するのだ。ああ、尽十方無碍光如来のみが宣布し、君臨し、招喚し、摂取して、寸毫も凡夫のわれを許されないのだ。この如来の本願海に、全我を托して、生死、善悪、賢愚、苦楽等かかる対立を越え、如来の聖なるみむねに生きるときのみ、安心立命はあるのだ。如来本願の御はからいなれば、永劫地獄にあるも苦としない。われはわれのわれでなくて、如来のわれである。煩惱は、如来のはたらきたもう舞台、信心決定すれば、如来は実に、今来りたもうのではない。過去久遠からの御はからいによつて、今あることを知るのだ。」

甲「たいへん間違っていたことがわかりはじめました。」